会計学のすすめ

takeshi mizuguchi

水口　剛

経済学部助教授
大学卒業後、数年間商社に勤め、
退職してから公認会計士試験を受験。
一時期、会計士の仕事をした後、企業の環境問題を研究するNPO「バルディーズ研究会」の事務局をへて、本学教員となった。専門は環境会計と社会的責任投資。
どちらも新しい分野なので世の中の動きが早く、忙しい。
今の楽しみはもっぱら子供と遊ぶこと。

会計は企業経営の羅針盤

私はこの場を借りて、広い意味での会計学の道案内をしたいと思う。会計とは企業という大きな船を動かすときの羅針盤のようなものである。航海をするとき航路を示す羅針盤が不可欠なように、経営に会計は不可欠である。会計を知らずに経営することは、計器の読み方を知らずに飛行機を操縦するようなものといってもよい。

もっともこう書くと、会計学とは手法や技術を学ぶだけだと思われやすい。たしかに技術的な側面が強いことは会計学の特徴なのだが、それだけが会計学ではない。たとえば会計は企業が利益を計算するときのルールを決めている。スポーツでもルールが変われば有利不利が変わってしまうことがあるだろう。同じように、会計の枠組みを決めている商法や国際会計基準などの制度が企業経営や社会にどのような影響を与えているか、逆にそのような影響を考えて制度をどのように設計すべきかなどを考えることも、会計学の重要な役割である。

会計とは何をすることか

会計の基本は、日常的な記録と期末の決算の二つである。まず日々の取引活動を帳簿に記録し、期末には貸借対照表や損益計算書という決算書類を作る。小さな企業ならば、いちいち計算してみなくても会社が儲かっているか、損しているかは分かるかもしれない。しかし会社がある程度の規模になり、材料の購入と製造と販売を分業するようになれば、それぞれの取引を記録して集計して見なければ、一体、会社が全体としてどうなっているか分からないだろう。経営の状況というのは、そのままでは目に見えないのである。目に見えなければ管理もできない。目に見えないものを見えるようにすること（可視化という）が会計の役割である。

まず簿記から始めよう

日々の取引を帳簿に記録し、その記録から決算書類を作成する一連の手続きを複式簿記という。会計の輪郭をつかむには簿記を学ぶのが近道である。勘定科目や仕訳など、簿記には会計の基礎となる事柄が詰まっている。ただし理屈だけでは不十分である。簿記は一種の技術なので、マスターするにはトレーニングがいる。日本商工会議所が1級、2級、3級などに分けて検定試験（日商簿記検定）を行っているので、これを目標に勉強してみるのもよいだろう。

簿記を越えて

簿記は会計学の出発点にすぎない。簿記の前提には、計算の方法に関する会計原則や会計基準がある。ところがこの会計基準がここ数年次々に変更されている。国際会計基準という国際的なルールに合わせるためである。基準が変われば、算出される利益の額も変わる。それは企業行動にも影響しかねない。本当にこの新基準がよいのか。そのような観点から会計基準のあり方を考えるのも会計学の役目である。

企業の活動は株主や投資家、銀行などから集めた資金によって行われるので、期末の決算は彼ら外部に対して公開される。そのような会計情報が市場での企業の評価を左右する。ところが高い評価を得たい経営者は、実態よりよく見せかけた決算（粉飾決算という）をする危険がある。粉飾が起これば会計情報に対する信頼性が失われ、誰も安心して資金を出せなくなる。それを防ぐためには企業の決算を第三者がチェックをする必要がある。これを学ぶのが会計監査論である。一方、公開された会計情報を読みこなすにもノウハウがある。それは経営分析という科目の役割だ。

経営者の立場からすれば、期末の決算で経営状況が分かっても遅すぎる。むしろ日常的に会計情報を活用して組織をコントロールする必要がある。そのための方法論を学ぶのが管理会計である。このほか原価計算や税法なども合わせて学ぶべき会計科目である。

環境会計の可能性

会計で計算する利益や売上高などの数値は、いずれも大きければ大きいほどよいと思われている。つまり会計は、より大きな利益や売上高の追求を促すようにできている。しかし利益の追求に偏った経営には弊害がある。たとえば今までの会計基準に従って利益だけを追求すれば、地球温暖化や化学物質リスクなど地球環境への悪影響を助長しかねない。自然環境に価格はついていないので、今までは会計の対象外だったからである。そこで企業活動の環境への影響を数値化して評価基準に組み込めば、企業行動を環境によい方向へと誘導できるのではないか。そのような観点から、今、「環境会計」という新しい会計が考えられている。たとえば地球環境を無視して利益だけを追求している企業と、環境問題にもきちんとコストをかけている企業を外からみて見分けられたら面白い。環境会計の数値をよくしようとして企業が競い合うと結果的に地球環境が守られる、そんな社会にならないだろうか。環境会計はまだまだ未完成の領域だが、環境省、経済産業省、日本公認会計士協会などを中心に検討され、先進企業での取り組みが始まっている。

このようなさまざまな広がりのある会計の世界にあなたも入ってみてはどうだろうか。

授業先取り、いいとこ取り

特集1

takeshi mizuguchi